

巻頭言

「ヒマラヤ学誌 12 号」をお届けする。

まず最初に、東日本大震災において被災された方々、ならびに震災関連の皆さまに心からお見舞い申し上げます。

ヒマラヤ学誌 12 号では、総合地球環境学研究所「高所プロジェクト」研究班（人の生老病死と高所環境—「高地文明」における医学生理・生態・文化的適応、プロジェクトリーダー：奥宮清人）（以下、地球研「高所プロ」と略）から 17 編の論考とエッセー、雲南懇話会から 5 編の論文を掲載させていただいた。

「高所プロ」では、高地住民の高所・低酸素適応のありさまを、生理学的な観点と文化的な適応の視点から研究している。本報告でも、現代のグローバル化の影響のもとに、高地住民において、とくに加齢のありさまと生活習慣病の実態がどのように変容しているかについて、多くの知見が報告されている。

現在、医学の最先端では遺伝子研究が盛んであり、高地住民の低酸素適応に関連する候補遺伝子が次々と明らかにされ、Nature 誌や Science 誌上で議論されている。しかし、一方で、生物学的遺伝子とは対照的な、高地住民のライフスタイルの変容と低酸素適応の関連に関する研究は乏しく、「高所プロ」の研究が、ダントツ世界をリードしている。

「生命」とは、たとえそれが最も原始的なものであっても、自己複製能力、外界からのエネルギー摂取と物質代謝能力、進化する能力をもっている。とくに、自己複製を担うのは遺伝子（DNA）であり、遺伝子はその生物がもっている全情報を子孫の世代に伝えてゆく。遺伝子情報が下の世代に次々と伝えられてゆく過程では、遺伝子をとりにく環境に最も適合した遺伝子が生き残り子孫を繁殖させる。この一連の過程は進化とよばれる。

自己複製子である遺伝子（ジーン）の特性をひとことでいえば、複製の正確さ、多産、寿命があること、であるが、リチャード・ドーキンスは、その著「利己的な遺伝子」において、遺伝子のように自己複製し情報を次々と次代につたえてゆく人間の文化伝達の単位をミームとよんだ。言語、思想、宗教、習慣、教育、道具の作り方、これら人間の文化—ミームは、生物学的遺伝子（ジーン）同様、複製、多産、寿命、という特徴をもっている。遺伝子（ジーン）が精子、卵子を担体とするのに対して、ミームは人の脳を担体とする。

数万年をかけて、高地住民の高所適応を進化させてきた生物学的遺伝子（ジーン）の低酸素適応は、人間の頭脳が造り出した文明、すなわち技術、教育、宗教、思想といったそれ自身生物学的遺伝子と同様に自己複製し自己増殖する文化的遺伝子（ミーム）とながらく相携えて共存してきたが、近年、大きな変化が起こりつつある。若いときには低酸素適応に有利に働いていたある種の遺伝子が、グローバル化による寿命の延長とライフスタイルの変容によって、高齢期の生活習慣病を促進させている可能性がでてきたのだ。若いときには有利にはたらいた機能が、高齢期になると不利に働く現象は、Trade off とも呼ばれるが、このような現象が、高地住民ではより先鋭的なかたちであらわれている可能性もある。21 世紀は、ジーンがミームにとって替わられる世紀といえるかもしれない。

「ヒマラヤ学誌」は、高地における医学・生理学、生態学、人文・社会学など、多様な領域を架橋するような学際的な論文を掲載してきた。ヒマラヤ学誌は、1990 年の京都大学ヒ

マラヤ医学学術登山計画を機に発刊された雑誌である。京都大学学士山岳会（AACK）の有志が中心となって京都大学ヒマラヤ研究会（ASH）を組織し、主としてそのメンバーによって編集が継続されてきた。AACKからも継続的な編集助成を受けている。途中に数年の間隔をおかざるを得なかったが、9号からは、総合地球環境学研究所「高所プロ」研究班の編集委員会と協働して編集し、ここ数年は主として地球研「高所プロ」の研究成果を発表する媒体として機能している。

一方、国際山岳連名（Union Internationale des Associations D'Alpinisme：UIAA）医療委員会では、従来は白人の高所適応に関する研究が主体であったが、2009年、“Non-Caucasian and High Altitude”に関する研究の重要性が議論され、（社団法人）日本山岳協会・科学委員会においても、研究を開始することが決定した。すなわち、従来、高所生理学の領域では、通常は平地に住む白人—Caucasianがどのようにして高所低酸素環境に適応してゆくかという、急性低酸素適応の問題が主として論じられてきた。しかし考えてみれば、長い時間をかけて高所低酸素環境に適応し、現在、高地住民として知られる人々は、Non-Caucasianがほとんどである。アンデス、チベット、エチオピア高地に住む高地住民の起源は、白人ではない。したがって、高所適応を論ずる場合の主要なアクターはNon-Caucasianともいえる。この意味で、総合地球環境学研究所の「高所プロ」はまさに、Non-Caucasianの高所適応に貴重な知見をもたらしているところから、本号では、Editorialとして概要をまとめた。

ヒマラヤ学誌12号では、地球研「高所プロ」の成果として、インド・ラダーク関連論文9編、インド・アルナーチャル・プラデーシュ関連論文2編、ペルー・アンデス、ブータン、ネパール他関連論文6編の論考を収載した。本誌12号では、地球研「高所プロ」の成果とは別に、東京在住のAACK会員が中心となって活動をしている雲南懇話会からも5編の寄稿をいただいた。

学際的な本誌を通じての、いっそう活発な討論を期待するものである。

なお、製紙工場の被災によって、今回、「ヒマラヤ学誌12号」の紙質を変更せざるをえませんでしたので、ご理解をいただきたいと存じます。

編集委員を代表して：奥宮清人・松林公蔵